ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』試論

――教養小説の視点を手がかりにして――

林　　久　博

はじめに

ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』(1774年)(以下『ヴェルテル』と略記)は発表当時、ドイツだけでなくヨーロッパ中にセンセーションを巻き起こした記念碑的作品であり、ドイツ文学の中で最もよく読まれた作品である。また同時に、その知名度からこの作品は研究者に好んで取り上げられ、様々な視点から解釈されてきた。[(1)]『ヴェルテル』研究をまとめた Hans Peter Hermann は、その研究史をその広範囲さから「見渡すことができなくなった」[(2)]と述べており、この作品が「単なる恋愛小説以上のもの」[(3)]であると見なしている。多様な解釈がある中で、特に本稿では『ヴェルテル』を「教養小説の一種」または「教養小説の変種」として捉えることから解釈のスタートを切ってみたい。

1.『ヴェルテル』と教養小説

ゲーテの教養小説と言えば『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』であり、『ヴェルテル』と教養小説を結び付けることはこれまでほとん

どなかった[(4)]。それ故に、筆者のこうした問題設定に違和感を覚えるかもしれない。しかしながら筆者には、この小説に教養小説という概念を持ち込むのは決して不自然ではないように思われるのである。その理由を述べておきたい。まず、ディルタイの教養小説についての有名な言葉を紹介しておきたい。

> 青年は幸福な薄明のうちに人生に踏み入り、自分に近い魂を求めて、友情と恋愛に遭遇する。しかし、やがて世間の厳しい現実と闘わざるをえなくなり、こうして様々な人生経験を積んで次第に成熟し、自分自身を見出し、世界における自分の使命を自覚するようになる[(5)]。

これが今日では教養小説についての最大公約数的定義となっているが、ここで述べられていることの多くがヴェルテルにも該当する。彼も一人の「青年」であり、ロッテとの「恋愛」に遭遇し、「世間の厳しい現実」に直面することになる。「世間の厳しい現実」とは、例えば、自分を見下す公使のもとでの仕事であったり、身分の違いによって夜会から締め出しを食うという屈辱的事件などである。ヴェルテルの場合、この両者、つまり「恋愛」と「世間の厳しい現実」に破れ自殺してしまい（もちろん他にも原因はあるが）、「人生経験を積んで次第に成熟する」ということはない。しかし、教養小説の主人公の辿る道をヴェルテルも途中まで辿っているのである。本論の結論を先取りして言えば、ヴェルテルはディルタイが掲げる教養小説の主人公の「挫折例」なのである。

ヴェルテルが挫折してしまうその理由については後で詳しく論じるが、彼が挫折する時期についてここで少し言及しておきたい。その時期とは青春時代のことである。主人公の成長過程において青春時代は特に重要で、この時期に若者は「異質な他者」との対決を強く意識すること

になる。『青春という亡霊』という著書の中で青春文学を論じた古屋健三氏は、青春時代ついて次のように述べている。

> 青年時代は［…］青春という美しい名で呼ばれた極めて重要で、人の一生を決する大事な時期であった。人はそこで異性を知って恋をし、個性に目覚めて進路を見定め、生きることに思い悩み、真理を手に入れようとあがき、社会の醜さに戦いたりした。純粋で、まだ半ば夢をみていて、心の気高さだけで世間の泥沼を渡っていけると頑固に思いこんではいるが、しかし実際には内面の深い泥に足をとられて、あっぷあっぷしている、とにかく矛盾だらけで、あらゆる問題が噴き出してくる、ドラマチックな年頃であった。(6)

青春時代は目覚めつつある個性（自我）と、それを取り囲む社会との葛藤が目立って噴き出してくる「ドラマチックな年頃」である。教養小説の主人公は、この青春時代を通過し、大人になっていく。しかしヴェルテルはここで躓いてしまっている。その理由は一体何だろうか。なぜ彼は青春時代を無事通過することができなかったのであろうか。それは後で詳しく論じるように、彼が青春時代という「熱いドラマ」をあまりにもまじめに演じすぎたからである。大抵の若者は青春時代にヴェルテルのように振舞ったりはしない。再度、古屋氏の言葉を引用しておこう。

> 青春とは光り輝く闇とでも言ってみるよりほかにはない、複雑で、魅力あふれる、特別な時間だが、大概の青年はそこで熱いドラマを演ずるというより、そこで出会った謎に魅入られ、立ちすくんで、手も足も出せず、たんなる観客で終わってしまう。そして、大人になってから、あきらめきれず、時節遅れの謎解きに乗り出したり、いまさらしても益のない後悔にほぞを噛んだりする。凡俗の徒とは、

このように青春をリアルタイムで味わい損ねた、未練がましい生き残りをいうのだろう。[…] 青春物語が […] ことごとく後悔の産物であるために、青春に殉じて散っていったヒーローが、ことのほか尊ばれることになる。青春の純粋さを貫いて命を絶った者、青春の純粋さを爆発させて汚い他者を葬った者、このふたつのタイプの青年が近代文学人気のヒーローとなる。(7)

ヴェルテルは言うまでもなく「青春の純粋さを貫いて命を絶った者」の代表例であり、青春を真剣に生きたヒーローである。ところが教養小説の主人公たちは青春に殉じることなく、ここを無事通過する。教養小説の主人公について Klaus-Dieter Sorg は次のように述べている。「教養小説の主人公たちは社会秩序の中で自分自身のために目標を探すが、それを一義的な納得のいく方法では見つけていない」、そして「彼らは結局、他者による部分的または全面的な規制を甘受することによってのみ確かな生活様式に達することができる」(8)。個人は社会の中で生きていかざるを得ない以上、「他者による部分的または全面的な規制」を受け入れざるを得ない。これは当然のことであろう。教養小説の主人公たちは社会の中で他者と折り合って生きていくために、自己抑制と諦念を学び取るのである。しかしヴェルテルはそうではない。「他者による部分的または全面的な規制」というものに対して拒否の態度を取る。まずこの点から本論を始めてみたい。

2．死に至る過程

2－1．自己感情の優先

ヴェルテルが「他者による規制」を拒んでいる箇所は、第 1 部の 5 月

26日の手紙に認めることができる。彼は他者によって決められた規則というものに対して拒否反応を示す。彼はこう述べている。「規則というものはすべて、誰が何と言おうと、自然の真実な感情と真実な表現とを破壊するものなんだ」(15)。彼は譬え話を持ち出す。それは恋をした男へ向かって役人が「時間を分け、一部は仕事をし、休み時間を恋に捧げよ」という忠告をした話である。それはひとつの理性的な忠告である。それに対してヴェルテルは「もしその青年が芸術家なら彼の芸術もおしまいさ」(16) と言って切り捨てる。彼は落ち着きではなく夢中になることを優先したいのだ。

規則ではなく自分の心と感覚を優先することは、ヴェルテルに限らず青年一般の特徴であろう。第1部の冒頭から彼は心と感覚をいっぱいに開いて自然と人間に眼差しを向けているが、ただ彼の場合それが極端なのである。彼は自然を眺めながらその創造者を夢想し、泉に集まる人々を眺めながら旧約聖書に見られる「昔の族長時代」(10) にまで想像力を働かせる。彼は心と感覚を広げすぎなのである。

この事実を強く印象付けるのが、作品冒頭のM伯爵の庭園の場面である。ヴェルテルはM伯爵が作った庭園がお気に入りなのだが、すでに故人となったこの伯爵に共感し、彼のために涙を流している (Vgl.8)。作品の冒頭から、彼のこうした感情過多や繊細さを読者は見せつけられるのである。

この感情過多や繊細さという内向性は、ヴェルテルを死へと追い詰めていく大きな要因である。だが、それだけが彼を死へと至らしめるのではない。様々な要因が重なって彼は自殺を決意するのである。

２－２．自殺願望、そして、いくつかの事件

ヴェルテルはレッシングの『エミーリア・ガロッティ』を真似てピストル自殺するが、もともと彼には自殺願望があったと言ってよい。例え

ば彼は「自分の好きなときに現世という牢獄から抜け出すことのできる自由」(14) について述べている。これは明らかに自殺を暗示する言葉である。また自殺についての議論の際に、アルベルトが自殺を弱さにすぎないと言って非難したとき、ヴェルテルは「暴君の耐えがたい圧政のもとに呻いている国民がついに反乱を起こし鎖を断ち切ろうとするとき、それが弱さと言えるだろうか」(47) と述べて自殺を擁護する。自殺を圧政に苦しむ国民の反乱に結び付けるヴェルテルのやり方はアルベルトには理解できないものであったが、要するにヴェルテルは自殺を、自由を求めて決然と立ち上がる行為と捉えているのである。

以上、簡単にヴェルテルの自殺願望について指摘したが、それは潜在的なものであって、自殺が直ちに実行されるわけではない。自殺へ至るには、それまでにいくつかの事件が起こらねばならない。それらの事件を辿ってみよう。

ロッテに恋したヴェルテルは恋する喜びに胸を高鳴らせるが、彼女はすでにアルベルトと婚約している。そのためヴェルテルは第 1 部の最後で絶望に暮れながら彼女のもとを去る決意をする。しかしながら、その後の彼には更なる挫折が待ち構えていた。それは彼が尊敬する C 伯爵の夜会での出来事である。そこでヴェルテルは特に無礼な振舞いをしたわけではない。ただ成り行きで偶然その場に居合わせただけである。しかしながら、貴族の集まりに顔を出していることが他の出席者たちには気に入らない。彼は C 伯爵にこう言われてしまう。「ご承知でしょうが、私たちの身分上のしきたりは奇妙なものなのです。どうやらお集まりのみなさまにはあなたがここにおられることが不満なようなのです。私は決して何とも…」(68)。C 伯爵は彼を傷つけまいとするが、ヴェルテル本人にとっては、まさにその場にいるということが「罪」として咎められたということである。彼にとってこの夜会での出来事は、自己存在を否定されたも同然の出来事であった。自分は存在していなくてもよい、

という意識をこの事件は彼に植え付けてしまう。彼はこの事件後ヴィルヘルムに「血管を切り裂いて永遠の自由を得たい」(71) と漏らしている。

この事件を機にヴェルテルは官職を辞し、ロッテのもとへ戻る決意をする。しかし、彼を厭世的気分にさせる暗い事件が続発する。第 1 部で登場した人物たちが、再度彼の前に現れるのだが、彼らはいずれも第 1 部で出会った時とは対照的に、彼と同じく暗いヴェールを纏っている。

まずはヴァールハイムで出会ったある母親である。当時彼女には三人の子どもがいて、彼女の夫は遺産を受け取りにスイスに旅行中であった (Vgl.16f.)。ヴェルテルは彼女に再会するが、その時彼女に聞かされたことは、子どもの一人が亡くなり、夫は遺産をもらえず帰郷し、現在は熱病で苦しんでいるという悲惨な境遇である (Vgl.76)。これはヴェルテルにとって、人生の儚さや不条理を思い知らされる出来事であったに違いない。というのも彼は言葉を失い、彼女に「何も言えなかった」(ebd.) からである。

次に若い農夫がヴェルテルの前に現れる。この農夫は知り合った当時、ある未亡人の女主人に恋をしていた (Vgl.18)。だがヴェルテルと再会したとき、この男の境遇は激変していた。この農夫は、女主人の方でも気のある素振りを見せたために肉体関係を求めたのだが、彼女に拒絶され、農場を追い出されていた。その後この農夫は、自分が追い出されたあとに雇われた別の男を、嫉妬のあまり殺してしまったのだった (Vgl.95)。一方ヴェルテルはこの時ロッテのことを想い、陰鬱な日々を過している。「もしアルベルトが死んだら」(76) ロッテは自分のものになる、という邪悪な考えを抱くようにもなっていた。この若い農夫は、アルベルトの死を望むほどの犯罪的心理状態にあったヴェルテルのドッペルゲンガーであると言ってよいだろう。それ故にヴェルテルはこの若い農夫を弁護する。しかし、ロッテの父親である郡長官は殺人犯を擁護するヴェルテルの非を咎める。さらにアルベルトも郡長官側に立ち、ヴェルテルは言

い負かされてしまう。これはヴェルテルにとって、アルベルトによる自己否定以外の何物でもない。

さらにヴェルテルはある狂人と遭遇する。この男は、恋人に花束を渡すために冬の野原で花を探している (Vgl.88)。実はこの男は、かつてロッテの父の書記を務めていたのだが、ロッテに恋したために職を追われ狂気に陥っていたのである (Vgl.91)。この男もまたヴェルテルのドッペルゲンガーとして設定されている。なぜなら、この男と同様にヴェルテルもまた、ロッテへの愛で理性を失いかけているからである。

以上のようにヴェルテルは、女主人に気に入られた男を嫉妬のあまり殺してしまう農夫や、ロッテを想うあまり理性を失って冬の野原に花を探し歩く男に出会うのだが、彼が期せずして目撃してしまうのは、「殺人」と「狂気」いう不幸な恋の結末である。人を殺すか、それとも自ら狂気に陥るか、このどちらも避けようとするならば、恋する主体そのもの、つまり自分の身を消し去るしかなくなる。ヴェルテルが自己存在を否定される出来事に何度も遭遇してきたために、自殺という方法に辿り着いたとしても何ら不思議ではない。しかも前述のように、彼にはもともと自殺願望があったのだから、なおさらである。

２－３．救い手の不在

上述のようにヴェルテルは自殺への意思を固めていくが、彼を救済する手段は残されていなかったのだろうか。悩む者は自分が一番不幸だと思い、自分の悩みを他と比較したりはしない。自分の世界に内閉し、自家中毒を起こしやすくなる。これを阻止するには、やはり、第三者による救済の手が必要である。つまり「救い手」の存在である。

ヴェルテルの精神状態を常に心配し気にかけているのは、手紙の受け取り手ヴィルヘルムである。ヴィルヘルムがヴェルテルに宛てた手紙を我々は読むことができないが、ヴェルテルの言葉から彼の優しい人柄が

透けて見えてくる。例えば7月20日の手紙には「公使といっしょに×××へ赴任した方がよいという君たちの考えに、どうも僕はまだ賛成する気になれないのだ」(40)［下線筆者］と記されている。ヴィルヘルムは彼を心配して転地を勧めているのである。場所の変更は気分転換を促すということを彼はよく理解している。

8月8日の手紙にはヴィルヘルムの忠告の内容が記されている。ロッテとうまくいけばそれでよし、だめなら潔く諦めろという二者択一である(Vgl.43)。これは極めて理性的な忠告ではあるが、ヴェルテルは「言うのは簡単だ」(ebd.)と言って彼の提案を退けてしまう。[9]

9月3日の手紙にはヴィルヘルムへの感謝の言葉が綴られている。「ありがとう、ヴィルヘルム、僕のぐらつく決心を固めてくれたのは君だ。もう二週間ものあいだロッテと別れようと思い続けている。僕は逃げなければならない」(56)［下線筆者］。ヴィルヘルムは手紙の内容からヴェルテルの精神的消耗が激しいことを察して、彼にロッテのもとを去るように何度も忠告していたことが、この感謝の言葉から見て取れる。

またヴィルヘルムは、ヴェルテルが定職についていないことを気にかけている。ヴェルテルはこう述べている。「これまでに何度か思い立って君と大臣に手紙を書いて公使館に職を見つけてもらおうかと考えたこともある。それなら君も保証してくれるように断られることはないだろう」(53f.)［下線筆者］。この言葉から読み取れるのは、公使館にヴェルテルに相応しい職があり、彼なら間違いなく採用される旨をヴィルヘルムがヴェルテルに伝えていたということである。ヴィルヘルムは彼を活動の領域へと導こうとしているのである。

こうしてヴェルテルはヴィルヘルムの忠告に従い官職につき、ロッテのもとを去っていく。ヴィルヘルムにはよく分かっているのだ、ヴェルテルを孤独にさせないこと、そして彼を活動へと導いてやることが何より必要だということが。第2部冒頭の手紙では、こうしたヴィルヘルム

の気持ちをヴェルテル自身もようやく理解できたことが見て取れる。

> 辛抱だ！辛抱することだ！そうすればやがてよくなるだろう。まったく君の言うとおりだ。毎日、人々の中に混じって追い回されて、人々のやっていることや仕事ぶりを眺めていると、僕は前よりもずっと自分自身と折り合いがつくようになってくる。[…] 孤独ほど危険なものはない。(60) [下線筆者]

自家中毒を起こさないように自己を外気に触れさせ日光消毒すること、こうした行為が何より必要だということが、ヴィルヘルムの言葉によってヴェルテルもようやく理解することができたのである。ヴェルテルにとって、ヴィルヘルムはひとつの「矯正策[10]」となる存在である。

さて次に官職についたあとのヴェルテルを見ていくことにしよう。彼は上司である公使と折り合いが悪いが、それでもメンターとなる存在に巡り合うことができた。C伯爵である。C伯爵も彼を行動の領域へと促す。C伯爵の方針はこうである。

> (他人に迷惑をかける人たちとも) 諦めて一緒にやっていかなければならない。山を越えなければならない旅人と同じことだ。そこに山がなければ道ははるかに快適で距離も短くなるだろう。しかし現にそこに山があるのだから、越えていかねばならない。(62)

ヴェルテルはすでに父親を亡くしている (Vgl.72) が、克己心に満ちたC伯爵は彼にとって模範となるべき「よき父親[11]」である。また彼はロッテとよく似たB嬢と親しくなったが、彼女は彼にとって「ロッテの代わり[12]」であると言ってよく、彼は充実した日々を過していた。しかしこのあとC伯爵邸での夜会事件が起きる。ヴェルテルは尊敬するC伯爵

にやんわりと追い出され、B嬢からは夜会で声をかけてもらえない。この場面では、「よき父のもとで政治的・社会的に成功し、同時に釣り合わぬ結婚として身分制度を越えた愛を実現できるというヴェルテルの潜在的希望は実現されないことが示される[13]」のである。ヴェルテルは身分制度そのものは肯定していたが、身分の違いがお互いの交流を妨げることはあってはならないと考えていた(Vgl.63)。C伯爵やB嬢も身分にとらわれない交流を大切にしていた。だからこそヴェルテルはこの二人の貴族と意志疎通できたのだが、この場面でC伯爵もB嬢もあくまで既成の秩序に従属しており、「存在と仮象、心情と振舞いの不一致をさらけ出す[14]」ことになる。C伯爵は結局ヴェルテルのメンターにはなりえなかった。

ヴェルテルは夜会事件で自己存在を否定され、追い打ちをかけるように彼のドッペルゲンガーたちも断罪されていった。ヴィルヘルムは彼が精神的に追い詰められているのを手紙から読み取り、彼を心配せずにはいられない。しかし11月15日の手紙では、ヴェルテルはヴィルヘルムに対して次のように返答している。

> ヴィルヘルム、君の心からの心配と好意のこもった忠告に感謝するよ。しかし安心していてくれ。やれるところまでがんばってみるつもりだ。ひどく疲れているが、最後までやり抜くだけの力はまだ十分にある。(85)

ヴィルヘルムの心配をよそに、ヴェルテルは自分の力でこの精神的危機を乗り越えようとしている。「孤独ほど危険なものはない」(60)と述べていたのはヴェルテル本人であったにもかかわらず。

案の定、ヴェルテルの精神は狂い始め、手紙を書くこともままならなくなる。そのために断片から事情を整理する編集者が登場することにな

る。編集者の登場以降、ヴィルヘルムに宛てたヴェルテルの手紙は僅かしか残されていないが、そのうちの一通12月20日の手紙を見てみよう。

> 本当に君の言うとおりだ。僕はここを立ち去ったほうがいいようだ。君たちのところへ帰って来いという提案には、そのまま従うわけにはいかない。少なくとも、ちょっと回り道をしてみたい［…］君が僕を迎えに来てくれるというのも本当にうれしい。ただ二週間ほどあとにしてほしい。もう一度詳しい手紙を書くから、それが届くまで待ってほしい。(101)

ヴィルヘルムは彼を迎えに行くという提案までしていた。しかし二週間待ってほしいという申し出のために、悲劇は起こってしまう。ヴェルテルはこの手紙から三日後の12月23日に自らの頭に銃弾を打ち込んでしまうからである。ヴィルヘルムの救いの手は届かなかった。

２－４．文学世界への依存

ヴェルテルは自らの身を破滅させるほどロッテを愛していた。そんな彼に対して、彼女はどのように振舞ったのだろう。ここでロッテについて考えてみたい。

ロッテは非常に頭のよい女性である。ヴェルテルと対等に文学談義もできるし、舞踏会の雷の場面では訪問客の恐怖を取り除くためにみんなでゲームをすることを提案する。知的であり、機転の利く女性である。そんな彼女が、頻繁に訪問してくるヴェルテルの気持ちに気付かなかったことは絶対にありえない。婚約者のいる身でありながら彼の訪問を拒まなかったのは、彼女の方でも彼のことが気になっていたからである。

トーマス・マンはロッテを「純潔に包まれた媚態[15]」と呼んだ。それは彼女の方からヴェルテルの感情を煽り立てているからである。その最も

よい例が「カナリア」の場面である (Vgl.79f.)。彼女は自分と接吻させたカナリアを、彼にも接吻させる。間接キスの形だが、これはヴェルテルからのキスを煽っているようなものである。また彼女は何度となくヴェルテルと二人だけで一つの部屋にいることがあったが、これも大胆不敵な行為であると言えよう。

こうしたロッテの挑発に対してヴェルテルはどうだったか。彼は何もしない。直接的行動には出ない。彼はかつて規則や規制といったものに対して嫌悪感を示していたが、いざとなると自らに規制をかけてしまうのだ。彼はこう述べている。「もう何百回も僕は彼女を抱きしめようとしたのだ！こんなに愛らしい人が目の前を行ったり来たりするのを見ていて、手を伸ばしてそれをつかんではいけないというのはどんな気持ちか、誰にも分かるまい」(84)。要するに彼は臆病で勇気がないだけなのだ。直接的行動を起こすには、あまりに彼は内向的なのだ。しかし彼は、オシアンの朗読後ロッテと口付けを交わすことができた。「彼は両腕をロッテに巻きつけ、彼女を胸に抱きしめて、彼女の震えながら口ごもる唇を狂おしい接吻で覆った」(115)。身体的接触に関して消極的だった彼に、なぜこのような大胆な行為が可能だったのであろうか。それは彼の「文学」との関わりが関係している。

ヴェルテルはかなりの読書家である。ホメロスやオシアンをはじめ実に様々な文学について彼は言及している。彼において特筆すべきことは、彼は文学を単なる虚構の物語として消費しているのではないということである。彼は「自分の生」と「文学世界」を重ね合わせているのである。もっと言えば、彼は文学の世界を「自分の生活の中に織り込んでいる」(29) と言ってもよい。具体例を示そう。まずはヴァールハイムの場面である。

僕は朝早く日の出とともに僕のヴァールハイムに外出し、そこのレ

> ストランの菜園で豌豆を摘み、座って莢の筋を取りながら、僕のホメロスを読む。それから小さな台所で鍋を選び、バターをすくい取り、豆を火にかけ、蓋をして、そばに座って、ときどきゆすって混ぜる。この時僕は、ペネロペの思い上がった求婚者たちが牛や豚を屠り、切り裂き、焼いた様子をまざまざと感じるのだ。(ebd.)［下線筆者］

豆を炒るヴェルテルと、ホメロスの『オデュッセイア』に登場する、動物を屠って火にかけるペネロペの求婚者とでは、明らかにその規模は異なる。しかし料理をしているという点では全く同じである。この共通点から彼は自己を物語の求婚者と同一視してしまう。その同一視の度合いは強く、物語世界を自分の身を持って「まざまざと感じてしまう」ほどである。このとき、ヴェルテルはホメロスを読むことによって、ヴァールハイムでの気持ちのよい朝に牧歌的な色彩を与えようとしている。

別の場面を見てみよう。ヴェルテルは夜会で屈辱的な体験をした後、ホメロスを手にその場から立ち去る。

> 僕はこの高貴な夜会からそっと抜け出して、一頭立ての二輪馬車に乗り込んで、Mへ向かった。そこの丘から太陽が沈んでいくのを眺め、僕のホメロスを取り出し、オデュッセウスが立派な豚飼いからもてなされる、あの素晴らしい歌節を読んだ。全部すばらしかった。(69)

この場面でヴェルテルは、善良な豚飼いエウマイオスにもてなされる、乞食に変装したオデュッセウスを自己と同一視している。彼は夜会から追い出された今の惨めな状況を、ホメロスを読むことによって埋め合わせている。

上の二つは特にホメロスの『オデュッセイア』からの例であるが、ヴェルテルはその時々の自己感情に適合した箇所を文学世界から選び出し、そこに自分を組み込んでしまう。虚構の文学世界を現実の自分に刷り合わせるという彼の傾向は、現実を直視しない態度である。それ故に、こういった姿勢はヴェルテルの生に危うさを与えるものであると言える。Hans Rudolf Vaget は、ヴェルテルにとって文学は一種の「麻薬」であり、その麻薬によって「自分の生を幻想化している」[16]と指摘している。

さて、ヴェルテルとロッテの身体的接触をもたらすオシアンの歌に戻ろう。オシアンの歌には様々な人物が登場するが、ここでは特に二人の女性に注目したい。それは恋人と兄が災いに満ちた神の定めによって死んでしまう二人の女主人公コルマとダウラである。二人の男の死を、彼女たちは嘆き悲しんでいる。このときアルベルトとヴェルテルという二人の大切な男性の間に立たされているロッテは、コルマとダウラに自己を見出して、心を激しく揺り動かされる。この歌を朗読してほしいと頼んだのはそもそもロッテだったが、期せずして彼女は自分の置かれている板ばさみ的状態を、この歌によって言い当てられてしまったのである。

それに対してヴェルテルはどうだったか。オシアンが歌っているのは、罪もないのに悲劇的な状況に置かれて雄々しく死んでゆくほかない英雄たちである。このときすでに自殺を決意していたヴェルテルが、自己をオシアンの世界の悲劇の英雄と同一視したことは間違いないだろう。彼が文学世界と自己を重ね合わせることについては、すでに指摘した通りである。こうして、この歌に感動したロッテとヴェルテルの心は重なり合う。「二人は自分たちの悲しい身の上を高貴な英雄たちの運命の中に感じ取った。二人は一緒に感じたのである。そして二人の涙は溶け合った」(114)[17]。

ヴェルテルは非常に臆病な青年である。直にロッテに向き合う勇気のないその男が、比較的無理なく彼女との口付けという行動へ移行するに

は、文学による仲介が必要であった。そのためにも彼は文学という「麻薬」に溺れていなくてはならなかったし、溺れていなければ彼女との口付けは不可能だったであろう。

文学依存傾向によってロッテとの口付けが可能となったヴェルテルであるが、先ほども指摘したように、これは現実を直視しない態度であるため、彼の生にとって危険なものである。案の定、彼は最後に『エリーリア・ガロッティ』を真似て自殺してしまう。彼は自分の死に対しても文学的な色彩を与えようとするのである。

3．まとめ

以上、ヴェルテルの死へと至る過程を見てきたが、彼はなんと思い込みの激しい不器用な青年であったことであろうか。だが不器用ながらもまじめに生きたその姿は青春のエネルギーそのものであって、それが今尚この作品に生命力を与え続けている。

さて、本論の試みは『ヴェルテル』を教養小説の視点から考察することであった。最初に述べたように、この視点から見れば、この作品は「ひとつの挫折例」である。主人公は「人生経験を積んで次第に成熟し、自分自身を見出し、世界における自分の使命を自覚するようになる」までには至らないからである。この作品は疾風怒涛期に発表されているが、この疾風怒涛運動は、それに先立つ啓蒙的合理主義に飽き足らない、ある種の非合理的なエネルギーの噴出であった。これは過激な主観主義と言ってよいものであるため、他者との間に関係性を築こうという教養小説の最終目標を、疾風怒濤期の代表作『ヴェルテル』に求めても不可能なのであろう。

だが、教養小説の主人公たちとヴェルテルを比較してみることによっ

て、ヴェルテルに足りなかったものも鮮明化されることになる。ではヴェルテルの場合、何がいけなかったのだろうか。教養小説の視点に立てば、彼に欠けていたのは明らかに救済者（メンターや友）である。教養小説ではそういった人物は必ず登場してくる。[18]『修業時代』のヴィルヘルムの前には塔の結社のメンバーたちが入れ替り立ち替り現れ、彼を導こうとしていた。『晩夏』では模範的メンターとも言えるリーザッハがいた。『緑のハインリヒ』第２稿では失意のどん底にある主人公をユーディットが救済する。『魔の山』では主人公に影響を与えようとセテムブリーニやナフタが登場する。教養小説の主人公たちは必ず、誰かの世話によって成長を遂げたり命を救われたりするのである。しかし、そういった人物がヴェルテルには用意されていない。Ｃ伯爵も手紙の受け取り手であるヴィルヘルムも、結局彼を救済することができなかった。悩める青年が人生経験を重ねていく上で救済者という存在がいかに不可欠であるか、ここに理解できるはずである。

今度は逆に『ヴェルテル』の視点から教養小説を見てみたい。そうすると教養小説のある種の「欠点」も見えてくるからである。ヴェルテルは「夢想の深みに溺れ、内省的思索に根っこを蝕まれ」[19]て自殺してしまう。彼は自殺によって、自己と社会のつながりそのものをなかったものにしてしまうが、そこに至るまでの展開はいたって自然である。それに対して教養小説では展開に不自然さがある。例えばそれは『修業時代』におけるヴィルヘルムとナターリエの突然の結婚、そして『緑のハインリヒ』におけるハインリヒとユーディットの再会に認めることができる。この二人の女性は主人公を救済するために登場するが、主人公と救済者との結びつき方はストーリー展開からすれば唐突である。そのため読者は、救済者の突然の出現に、作者の意図的な操作を感じ取ってしまう。Wolfgang Kayser も「教養小説はなんとなく人工的な感じがする」[20]と述べている。しかしこの人工性は、ある意味で仕方のないことである。教

養小説が目指すところは、「私」として孤立した自我と現実世界の間の抽象的な対立を乗り越え、その対立を揚棄することである。だが、この対立を克服することは容易なことではない。それ故に、教養小説の最終部では何とかしてこの対立を乗り越えようとして、作者が主人公の人生に強引に介入することになり、その結果、ストーリー展開上の不自然さが滲み出てしまうのである。その理由について Roy Pascal は、「登場人物や事件がそれ自体の権利において存在するというよりも、単なる意味の運び手として描かれている[21]」からだと主張している。

しかしヴェルテルは、小説自体の単なる「意味の運び手」として登場しない。「それ自体の権利」を行使し、自らの生を享受し尽くした存在として描かれている。ヴェルテルは自我と社会との抽象的対立を乗り越えるという教養小説的目的論へは組み込まれないが、彼はそのぶん人工性を帯びることのない、自らの生を生ききった人物であるということも、この比較によって明確化されたように思う。

テクスト

Goethe: Die Leiden des jungen Werther. In: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 6. Hrsg. von Erich Trunz. 14. Aufl. München (C. H. Beck) 1996. を使用した。テクストからの引用は本文中（　）内にページ数を記した。

注

(1) 最新の研究史は Hermann, Hans Peter: Einleitung. In: ders. (Hrsg.): Goethes ›Werther‹. Kritik und Forschung. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1994, S. 1–19. にまとめられている。ここで挙げられている代表的な研究例を挙げておくと、構造主義（Michea）、受容研究（Jäger）、精神分析（Kaempfer）、二つの版の違いについて（Gerhard）、伝記的・時代史的考察（Beutler）、形式の独自性について（Kayser）、マルキシズム的観点（Lukács）、世俗化の観点（Schöffler）、読書行為の歴史的観点（Kittler）などがある。

(2) Ebd., S. 3.

(3) Ebd., S. 18.

(4) Thomas Kahlcke の著書では『ヴェルテル』が教養小説として分類されている。Kahlcke, Thomas: Lebensgeschichte als Körpergeschichte. Studien zum Bildungsroman im 18. Jahrhundert. Würzburg (Königshausen und Neumann) 1997, S. 209–217.

(5) Dilthey, Wilhelm: Das Erlebnis und die Dichtung. 10. Aufl. Leipzig und Berlin (B. G. Teubner) 1929, S. 393f.

(6) 古屋健三：『青春という亡霊—近代文学の中の青年—』（日本放送出版会 2001年） 9頁

(7) 同上。68–69頁

(8) Sorg, Klaus-Dieter: Gebrochene Teleologie. Studien zum Bildungsroman von Goethe bis Thomas Mann. Heidelberg (Carl Winter) 1983, S. 9.

(9) ここでヴィルヘルムはヴェルテルに何らかの行動を起こすように促している。取るべき方法はわかっているのに躊躇して行動を起こさないのは、一種の「怠惰」とも言えるが、この「怠惰」を激しく攻撃していたのはヴェルテル本人であった。彼はこう述べている。「僕たちは生まれつき怠惰に傾きやすいようにできていますが、ひとたび自分を奮い起こす力を持ちさえすれば、仕事も気持ちよく捗り、活動することに真の喜びを見出すものです」(33)。ここに彼の自己矛盾を指摘することができる。

(10) Siepmann, Thomas: Lektürehilfen. Johann Wolfgang von Goethe „Die Leiden des jungen Werther“. 3. Aufl. Stuttgart (Klett) 1993, S. 75.

(11) Kahlcke, S. 213.

(12) Ebd.

(13) Ebd.

(14) Ebd, S. 213f.

(15) Mann, Thomas: Goethe's ›Werther‹. In: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Bd. 9. Frankfurt a.M. (Fischer) 1990, S. 652.

(16) Vaget, Hans Rudolf: Die Leiden des jungen Werthers. In: Paul Michael Lützeler u. James E. McLeod (Hrsg.): Goethes Erzählwerk. Stuttgart (Reclam) 1985, S. 52. 上記論文に記載されている研究者の見解をここでいくつか紹介しておくと、Heinz Schlaffer は「ヴェルテルの読書は疾患であり自己欺瞞である」と述べ、Peter Pütz はヴェルテルが「文学という麻薬に溺れている」という診断を下している。

(17) 一冊の書物を二人で朗読することによって、その二人がお互いへの愛を

確認し合い、やがてその精神的結びつきが二人の口付けへと移行するというモチーフは、Kittler が指摘しているように、ヨーロッパ文学には伝統的に存在していることである。Kittler はダンテの『神曲』の中のパオロとフランチェスカの例を取り上げている。この二人はアーサー王伝説のランスロットと王妃の愛をめぐる一節を朗読し、高ぶる肉体的欲望の中に落ち込んでゆく。ゲーテはこの伝統をこの場面で利用している。Kittler, Friedrich A.: Autorschaft und Liebe (1980). In: Hans Peter Hermann.(Hrsg.): Goethes ›Werther‹. Kritik und Forschung. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1994, S. 295–316.

(18) 教養小説の詳しい考察については、拙論を参照「ドイツ教養小説研究—ゲーテからトーマス・マンまで—」名古屋大学大学院文学研究科平成15年度博士論文。

(19) Goethe an Gottlieb Friedrich Ernst Schönborn vom 1. 6. 1774. In: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 6. Hrsg. von Erich Trunz. 14. Aufl. München (C. H. Beck) 1996, S. 525.

(20) Kayser, Wolfgang: Entstehung und Krise des modernen Romans. Stuttgart (Metzler) 1954, S. 25.

(21) Pascal, Roy: The German Novels. Manchester (Manchester University Press) 1956, S. 304.